

アメリカの安全保障政策に依存・協調しつつ、非核三原則を掲げてきた戦後日本の矛盾。事実上の一党支配が終焉しようとしている今、私たち主権者の責任として新しい政権にまっさきに問うべきは何か、広島市長が今年の平和祈念式典で強調した「被爆国としての責任」とは何か、重ねて考えていかなければならないと思います。その手がかりのひとつとして、終戦の直前、本土防衛の盾となって凄惨な地上戦が展開された沖縄戦と、その沖縄に戦後集中的に置かれてきた「米軍基地」の問題を学びたいと思います。お誘いあわせてご参加ください。

## 学習会

「沖縄への負担軽減」の名のもとに、米軍の実弾演習場として有数の王城寺原では何が行われてきたのでしょうか？

### お話 「王城寺原は今」

お話 高橋浩太郎さん(宮城県平和委員会)

ドキュメンタリー映画「ひめゆり」に続いておくる“もうひとつ”の沖縄戦証言の記録。60分。  
戦闘だけが戦争ではない。「戦争」の重さを伝えて余りある、北部ヤンバルでの沖縄戦の実相、伊江島での集団自決の惨状…。

### ドキュメンタリー映画 「未決・沖縄戦」

お話の前後に2回上映いたします。

日時 9月19日(土)

PM 1:30～ 一回目上映  
PM 2:30～ お話し  
PM 3:30～ 二回目上映

場所 仙台市戦災復興記念館4F研修室

会場費・資料代 300円

主催 「テロにも戦争にもNOを！」の会  
連絡先 022-248-2866 春日  
090-7936-3437 須藤

# 北部の証言映画に

## 「未決・沖縄戦」を制作

【名護】映画制作や沖縄関連書籍の制作を手掛けるじんぶん企画(興石正代表、名護市)がこのほど、北部の沖縄戦体験者の証言をまとめたドキュメンタリー映画「未決・沖縄戦」を制作した。北部に地域を限定した証言映画としては初の試みで、興石さん(62)を中心に各地に出向き聞き取りした。興石さんは作品を通して「沖縄戦は中南部の激戦地だけで起こったのではなく、ヤンバルに避難した住民生活の末端にまで影響を及ぼし、全体を巻き込んだものだ」と問題を投げ掛けている。

映画はカラーの九十分作品。愛楽園と沖縄戦、八重岳、多野岳、伊江島での戦闘、捕虜収容所の様子、朝鮮人軍夫の存在など、体験者の話を軸にまとめた。

タイトルの「未決」には、「沖縄戦はまだ終わっていない」「映画が終わりでなくこれが始まり」という二つの意味を込めた。

制作のきっかけは、昨年九月の教科書検定意見撤回を求める県民大会への参加

だ。「沖縄戦の伝え方が体験者の言葉を借りてパターン化している。自分の足で現場に出向き、もっと掘り起こすべきではないかと感じた」

北部の各地域に残る字跡を読みあさり、沖縄戦の記録が残る地域を駆け回った。一番印象に残ったのは、伊江島での「集団自決」(強制集団死)生存者

・大城安信さんを取材した時のこと。これまで重く口

を閉ざしていたという大城さんだが、取材を承諾してくれた。当時九歳だが記憶は鮮明で、自ら記した文章と絵を持参していた。

しかし現場に向かう途中で、大城さんは決して振り向かず、一言も口を開かなかった。「その背中は話す覚悟を決めたという感じだった。いい映画に仕上がったと思う」と、心に誓った。

証言者がカメラに慣れるまで撮影を続け、一人三時

間以上かかったという。二

十八人を取材し、九人から取材を拒否された。証言者は氷山の一角。その背後につらくて語れない心の傷を抱えた生存者や声なき戦没者の姿を見通すことが大切

だ」と撮影を振り返った。無料上映会が二十一日午

後六時三十分から、同市大中区公民館で行われる予定だ。映画はDVDとして発売予定で、定価三千円(消費税、送料込み)。問い合わせはじんぶん企画(名護高等予備校内)☎0980(53)6012。

(慶田城七瀬)

2008年(平成20年)8月11日 月曜日 朝日新聞 (夕刊)

### 窓

論説委員室から

### 終わらない沖縄戦

沖縄県名護市の予備校で教壇に立つ興石正さん(62)が沖縄本島北部の戦争体験者の証言を記録したドキュメンタリー映画「未決・沖縄戦」を制作した。

本島北部に限定した沖縄戦の証言映画としては初の試みだ。沖縄戦は中南部の激戦地だけで起きたのではなく、戦闘だけが戦場ではない、という思いがある。

制作のきっかけは、昨年9月に開かれた教科書検定意見の撤回を求める県民大会だ。「歴史の書き換えは許さない」と沖縄は燃え上がったが、その脈絡がわからないという声が生徒から出た。約10年前から、北部の各地域に残る70冊以上の字誌など郷土史誌を読みあさってきた興石さんは教師として責任を感じた。

映画では13人が旧日本軍による住民虐

殺や、朝鮮人慰安婦の存在などについて生々しく証言している。大城安信さん(76)は伊江島で起きた「集団自決(強制集団死)」を語った。24人中2人しか生き残らなかった惨劇について、これまで重く口を閉ざしてきたが、県民大会の盛り上がり心を開かされた。

興石さんが取材を申し込んだのは32人にのぼる。いまなお拒否せざるを得ない人のなんと多いことか。体験者にとっても沖縄戦がいまだ終わっていないことを如実に物語る。証言者の言葉の背後には、おびただしい「不在の証言」が横たわっているのだと痛感する。

映画はDVDで発売中。問い合わせはじんぶん企画(0980・53・6012)へ。〈大矢雅弘〉